

福島県いわき市大原貝塚採集の製塩土器

Salt-Making Pottery Found in the Ohara-Shell Mound of Iwaki City, Fukushima Prefecture

渡辺 誠 (WATANABE Makoto)¹⁾・森 泰通 (MORI Yasumichi)²⁾

- 1) 名古屋大学名誉教授
Emeritus Professor of Archaeology, Nagoya University
2) 豊田市役所
Toyota City Hall

Abstract

The Ohara Shell Mound belonging to the Nara period is situated on the old dune of Onahama Bay in the southeastern part of Tohoku region. Only the salt-making potteries and shells were found in 1968 at the site. The salt-making potteries are cylindrical in form, and this type of pottery is distributed over Ibaragi and Miyagi Prefectures. The development of the Nara and Heian period-salt-making pottery in these areas is thought to have been related to the political situation of these days.

遺跡の位置

大原貝塚は、東北地方の東南端に位置する福島県いわき市に所在する(図1)。いわき市には茨城県に接する南より、鮫川、藤原川、夏井川流域の沖積平野が展開している。筆者が製塩土器を採集した大原貝塚は、このうちの西南流して小名浜湾に注ぐ藤原川流域の平野に位置している。この平野には現海岸線より約0.5km奥に、ほぼ東西方向をむく幅約300m、長さ約1.5kmの古砂丘が存在する。

この古砂丘の東端は丘陵下の諏訪神社付近であり、この神社裏の弥生時代の諏訪後貝塚(図2-1)からは、弥生時代では北限に当る貝製腕輪を嵌めた人骨が出土している(渡辺, 1967)。そして西端は藤原川に合流する矢田川によって切られているが、大原貝塚はこの西端地区に立地している(同2)。この付近での海拔高度は約2.5mである。

これよりさらに内陸には、御代貝塚(同3)など縄文時代中・後期の外洋性貝塚が存在することから、この砂丘の陸化・形成期は縄文時代晩期～弥生時代と推定される。

発見の経緯

大原貝塚は藤原川・矢田川の合流地点東岸に位置し、古くよりその存在が知られていた(八代, 1932)。これをA地点とする。このA地点について、B地点発見当時の記録には、矢田川の東で、東西方向の道路の南に、約200m²にわたって貝および土師器が散布しているが、その種類などは両地点ともほぼ同じであると記されている(渡辺, 1957)。この土師器こそ後に製塩土器と判明したものである。なおこの東側には、戊辰戦争における仙台藩士犠牲者を記念した石碑が立っている。

製塩土器を採集したB地点は、このA地点より矢田川に沿って約200mさかのぼった地点であり、当時磐城高校3年生であった筆者が1957年1月30日に発見した(図3)。

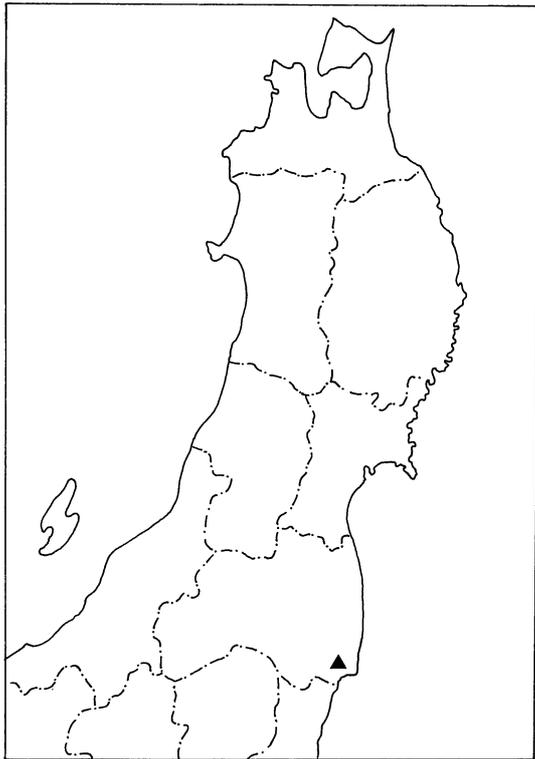


図1 大原貝塚の位置

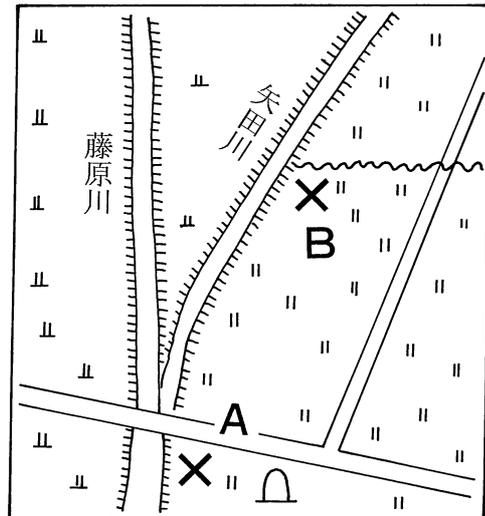


図3 大原貝塚概略図

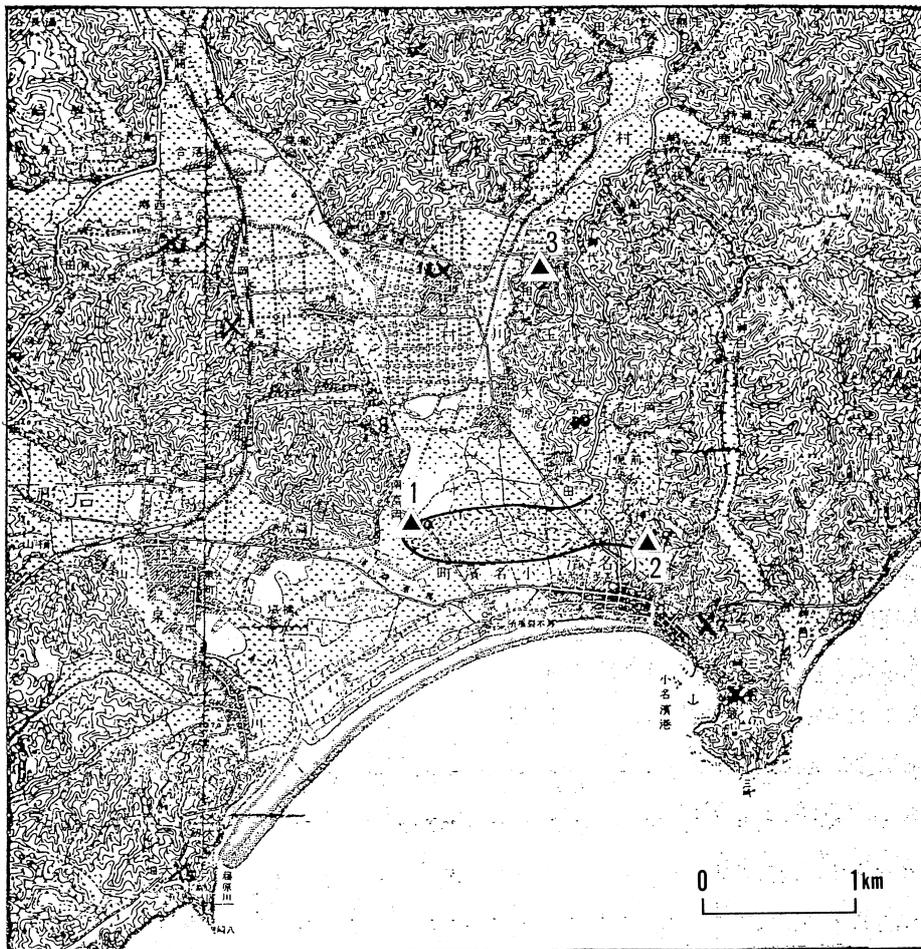


図2 大原貝塚付近地形図（1：大原貝塚，2：諏訪後貝塚，3：御代貝塚．八代1932に加筆）



図4 B地点貝塚概略図

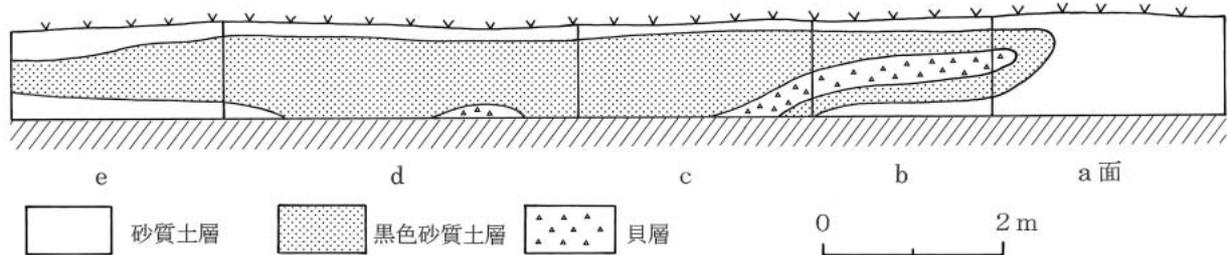


図5 B地点貝塚断面図

その日筆者は大原貝塚を訊ねて、矢田川の堤防上を南に向かって歩いていた。そして堤防下の畑地において、約1mの深さで土取り工事で削平されているのを見て下に下りたところ、断面に貝層を発見したのである（図4）。

層序の観察

層序は削平された a～e の各面を連続的に記録したが、貝層は主として b 面にみられ、c 面にも僅かに確認できた。この b 面においては、約 20cm 程の表土層（砂質土層）の下に約 70cm 程の黒色砂質土層があり、この層には製塩土器がみられる。土器片は細かい碎片のみである。この層中に厚さ 30cm 程の貝層があり、c 面などを見ると南に傾斜している貝層であることがわかる。黒色砂質土層下の地山は、表土と同じ砂質土層である。

貝類と年代測定

貝層を構成する貝の種類は、次の 5 種である（写真 1）。

A. 腹足綱 GASTROPODA

1. ニシキウズガイ科ダンベイキサゴ *Umbonium (Suchium) giganteum* (Lesson)

B. 斧足綱 PELECYPODA

1. イタボガキ科マガキ *Grassostrea gigas* (Thunberg)
2. マルスダレガイ科ハマグリ *Meretrix lusoria* (Röding)
3. マルスダレガイ科チョウセンハマグリ *Meretrix lamarckii* (Deshayes)
4. マルスダレガイ科アサリ *Tapes (Amygdala) japonica* (Deshayes)

量的には、よく発達したチョウセンハマグリとキサゴが半々で、ほぼ全体を占めている。

現在保管されているのは、ダンベイキサゴ 3 点、マガキ左殻 1 点、ハマグリ右殻 3 点、チョウセンハマグリ左殻 3 点、アサリ左殻 1 点である。

これらは、沿岸砂底群集のダンベイキサゴ・チョウセンハマグリと、内湾砂底群集などのマガキ・ハマグリ・アサリの 2 群に大別されるが、前者が圧倒的多数を占めている（図 6）。製塩のために、直接外洋に面した場所に占地したことをよく示しているとみることができる。

チョウセンハマグリ 1 点について、名古屋大学年代測定総合研究センター・中村俊夫教授によって ¹⁴C 年代測定が行われ、その結果は次のとおりである。

1210 ± 80BP (NUTA - 1091)

これを暦年代に較正した年代は AD779 年となり、奈良時代後期を示している。

製塩土器

採集され、現在保管されている土器片は少なく、須恵器 1 点を除き、他の 11 点はすべて製塩土器である。

A. 須恵器（図 7-1、写真 2-1）

器種不明であるが、壺類の頸部～体部と考えられる。内外面とも、赤褐色を呈している。

B. 製塩土器（図 7-2～22）、写真 2-6-2～22）

製塩土器は 21 点が確認される。いずれも小片であるが、2～4 が口縁部、5～7 が体部、8～22 が底部周辺の破片である。

2 は口径 10.8cm 前後となる資料で、径の 1/5 程を残している。口縁部が縁帯状に厚くつくられており、それに伴う段差が内面に認められる。外面には粘土紐の接合痕と指頭痕が残る。3・4 は擬口縁である可能性も捨てきれない。2～4 とともに外面は 2 次的に鈍く赤変している。また、外面が調整されず雑で、細かな亀裂を多く持つのに対し、内面は丁寧にナデ調整が施されていることを特徴とする。

体部の破片はいずれも器厚 8 mm 前後である。5 は強いヨコナデにより、内面に段差を生じている。

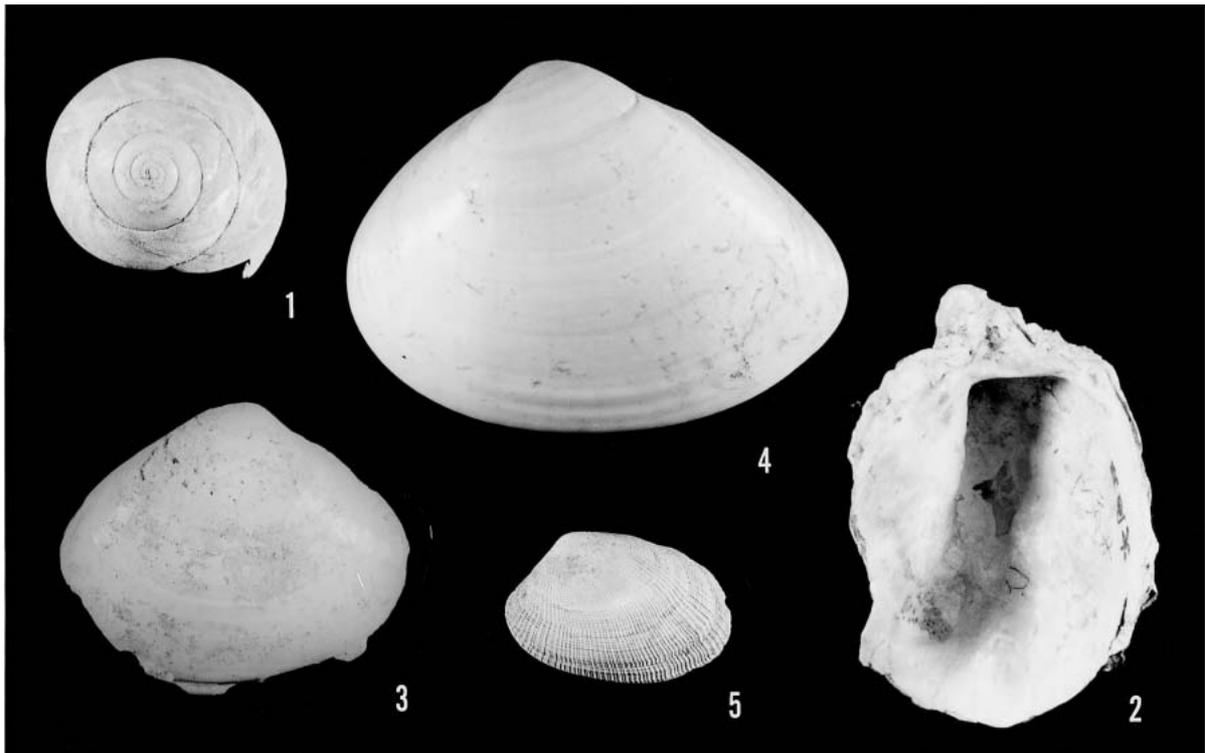


写真1 B地点貝塚採集貝類 (実大)

1：ダンベイキサゴ， 2：マガキ左殻， 3：ハマグリ右殻， 4：チョウセンハマグリ左殻， 5：アサリ左殻。

水域	沿岸水			内湾水						
地理的位置	湾の外側			湾口部	波食台	湾中央部		湾奥部	河口	
底質	岩礁	砂泥質	砂質	砂礫質	岩礁	砂質	シルト-泥質	砂泥質	砂泥質	
潮間帯							干潟群集 マガキ ウネナシ トマヤガイ ハイガイ オキシジミ イボウミコナ		感潮域群集 ヤマトシジミ カワサンシヨウ ヌマコダキガイ	
-----	外海岩礁性群集 サザエ アウビ クボガイ バテイラ カコボラ 沿岸砂底群集 ●ベンケイガイ ●チョウセンハマグリ ●ダンベイキサゴ コタマガイ フスレガイ			内湾岩礁性群集 オオヘビガイ キクザルガイ ●マガキ 穿孔貝類 砂礫底群集 イワガキ イタボガキ ウチムラサキ イボキサゴ			内湾砂底群集 ●ハマグリ カガミガイ シオフキ イボキサゴ ●アサリ サルボウ 内湾泥底群集 ウラカガミ イヨスタレ アカガイ トリガイ シズクガイ		藻場群集 チクサガイ シマハマツボ マキミソ ススメモツボ	
上部浅海帯	沿岸砂泥底群集 イタヤガイ マツヤマウスレ スタレガイ ヤツシロガイ ナガニシ テングニシ						内湾停滞域群集 シズクガイ チヨノハナガイ ケシトリガイ ヒメカノコアサリ マメウラシマ			

図6 貝類群集の分布 (松島・前田 1985 に加筆)

内外面の調整の違いは口縁部に同じである。

底部は概して残りが悪い。不安定であるが、底部径の1/8前後を残す8~11を反転すると、順に底径9.0cm、15.8cm、13.0cm、11.4cmとなり、ややばらつきが大きい。底部は厚さ3~4mmで、体部に比べて薄くつくられている。器面の調整は他の部位に同じで、内面は平滑にナデられている。

底部内面は大半が鈍く赤変している。外面は強く赤変するもの、胎土と同様の黄灰褐色を呈するも

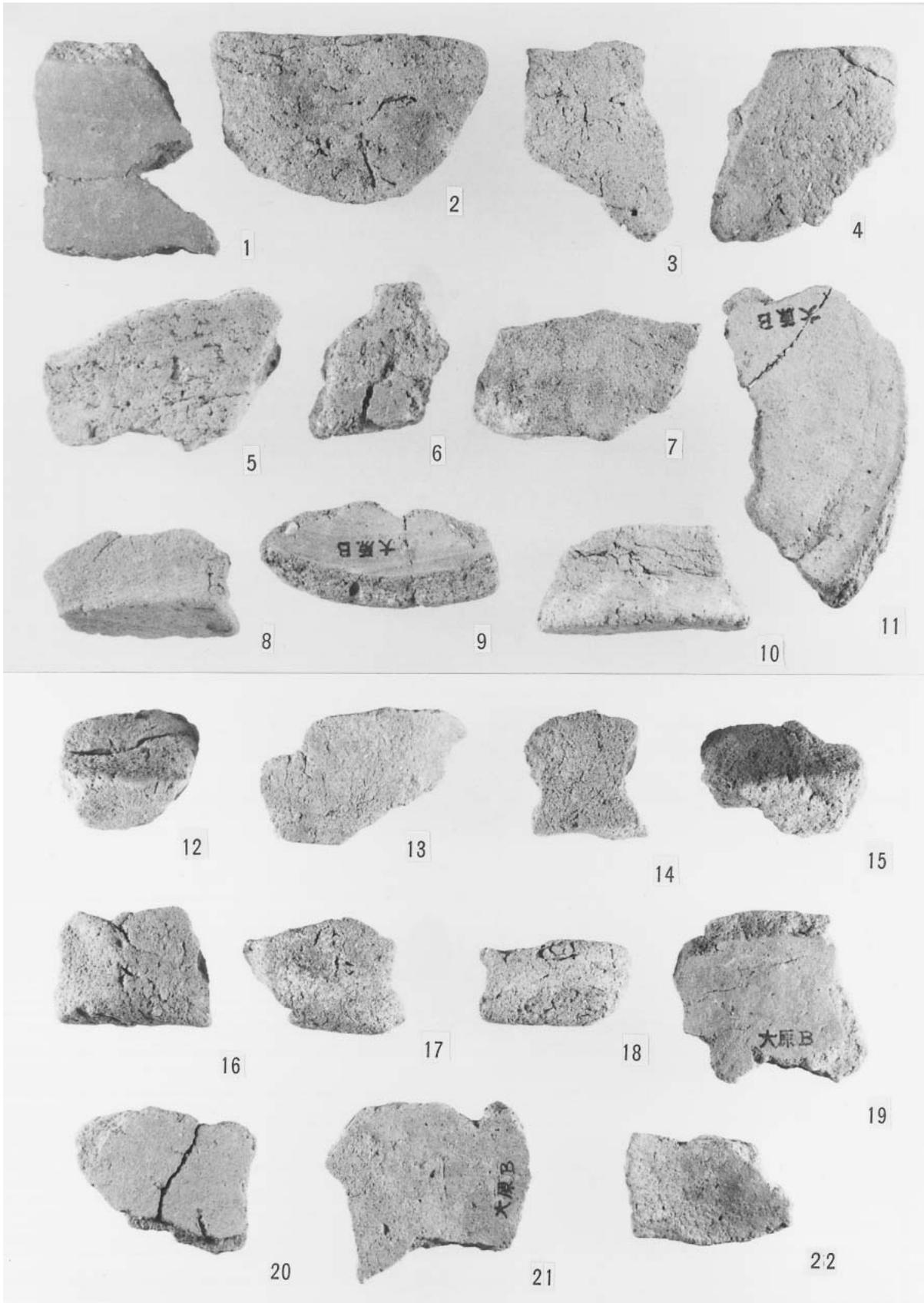


写真2 製塩土器（2分の1大，番号は図7に対応）

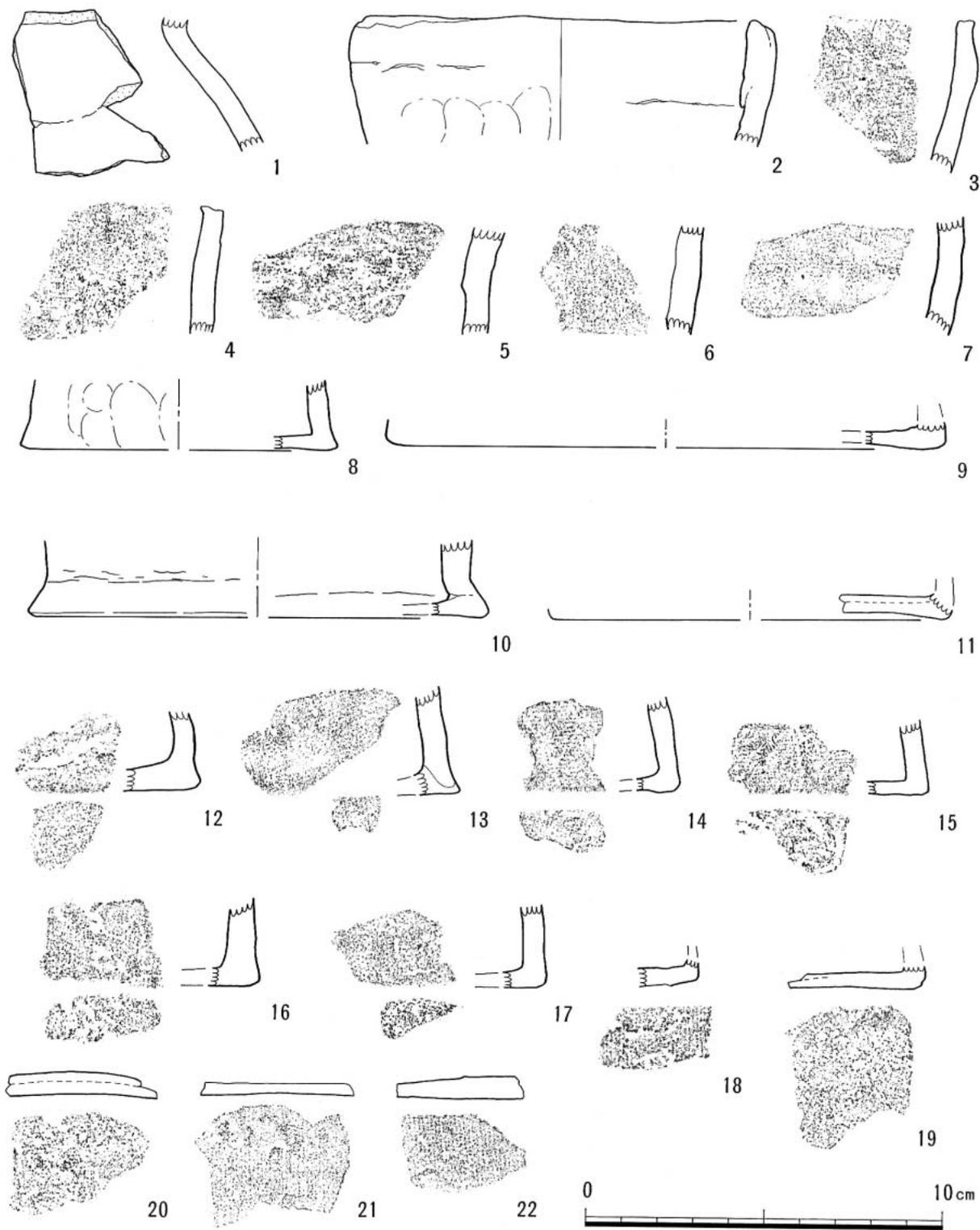


図7 製塩土器実測図

の、灰味の強い暗い色調になるものなどさまざまであるが、器表面が剥離した断面において、はじめて赤変が確認される資料もある。

また、製塩土器に特有な現象であるが、11・19・20は底部が二重に剥離している。いずれも内面側の断面が強く赤変している。また、21の底部外面には斑点状にゆるい赤色部位が認められ、製塩土器の特徴を示している。

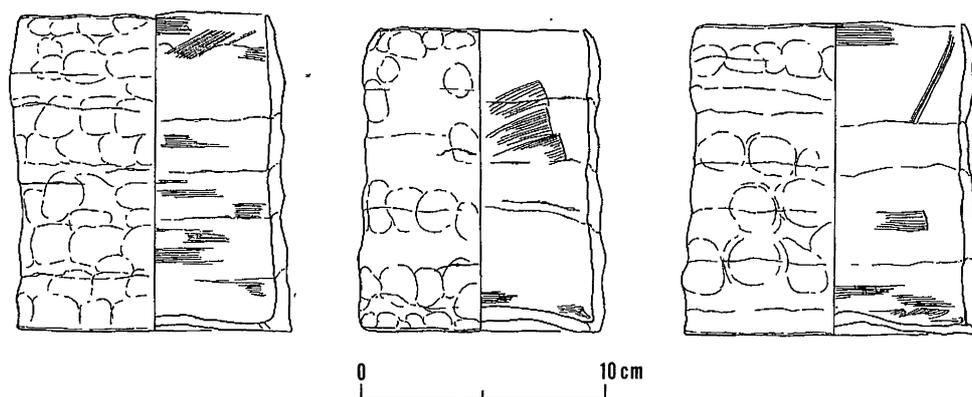


図8 赤粉遺跡出土製塩土器実測図（宇佐見1997より）

福島県内では1994年の段階で、63遺跡から古代に属する製塩土器が確認されている。いずれも体部が筒形を呈し、口径8～15cm、器高15cm前後、底径10～15cm前後の資料である。これらは県内の平安時代集落の半数以上から出土しており、内陸部を含めて、広範に分布していたことがわかる（辻，1994）。時期は9世紀初頭から11世紀に及ぶ。また、隣接する茨城県北部でも同様の筒形土器と、体部の短いシャーレ形土器の2種が認められている（瓦吹，1998）。

大原遺跡の製塩土器は、全形をうかがうことはできないが、これまで東北南部から北関東地方で報告されている筒形、あるいはシャーレ形の器形になると考えられる（図8）。これらの大半は平安時代に属しているが、一部で奈良時代に遡る資料も確認されている。

若干の検討

大原遺跡採集の製塩土器は細片のみであるが、福島県太平洋岸中部の双葉郡楢葉町赤粉遺跡例に代表される筒形であったと推定される。そしてそれらは近接する茨城県および宮城県下の例と同形態であること、そのうえ奈良時代から平安時代にかけての所産であること、すなわち中央政府による東北進出が活発になる時期であることに注目される。すなわち兵士の食料として重要性が高まったことと密接な関係があると推定される。今後は単に食料問題としてではなく、政治・軍事的な背景をも視野に入れた研究が必要であると考えられる。

引用文献目録（五十音順）

- 宇佐見雅夫（1997）赤粉遺跡。福島県楢葉町。
 瓦吹 堅（1998）常陸の古代製塩土器覚書。史峰，**24**，21-30，いわき。
 辻 秀人（1994）福島県。日本土器製塩研究，65-71，東京。
 松島義章・前田保夫（1985）先史時代の自然環境。東京美術，東京。
 八代義定（1932）福島県藤原川流域の石器時代遺跡と其年代。人類学雑誌，**47-4**，149-160，東京。
 渡辺 誠（1957）磐城市（旧小名浜町）大原貝塚。磐城考古，**1**，5-7，いわき。
 ——（1967）磐城市諏訪後貝塚出土の貝輪。福島考古，**7**，18-19，福島。

謝 辞

本稿をまとめるに際しては、多くの方々の御教示と御協力を仰いだ。末尾ながら御芳名を銘記して深謝の意を表する次第である（敬称略、五十音順）。

木幡成雄・坂本和哉・高山 純・中村俊夫・吉田泰幸。